平成２４年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	軽度発達障害児・者の発話に方言の韻律的特徴は反映されるか？

研究代表者

氏名	所属	職名
出口利定	総合教育科学系 教育心理学講座	教授

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】　（文字の大きさ 9 ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

【要旨】

音声は、言語情報のみならず話し手の特性や意図、感情なども伝達している。このようなパラ言語的・非言語的情報の伝達を担っているとされているのが、韻律的特徴、つまりプロソディである。プロソディとは、ピッチやアクセントといった音声における諸要素の総称である。

コミュニケーションに質的な問題があるとされる軽度発達障害児、特に本研究においては自閉症スペクトラム障害（ASD）において、独特なプロソディの特徴が報告されている。ASD 児者のプロソディの特徴について、近年では音響分析により研究が行われ始めているが、国内ではほとんど研究がなされていない。

そこで研究Ｉでは、ASD 児および定型発達児を対象に、音読音声と、説明課題による自由発話を収集し、音響分析により検討を行った。その結果、ASD 児は定型発達児と比してピッチの変動幅が小さかった。その一方で、変動幅が極端に大きい児童も存在していた。ASD 児のピッチ変動幅に関して、先行研究では意見が分かれていたが、本研究の結果から、極端に小さい、つまり抑揚が平坦なパターンと、極端に大きい、つまり抑揚が激しいパターンの 2 種類が存在していると考えることができる。また、声の高さについては、ASD 女児の平均ピッチが定型発達女児よりも低い可能性が示唆され、更なる検討が必要である。また、自由発話では、発話内容や発話量の個人差が大きく、課題実施における言語能力などの影響が見受けられた。他に、定型発達児では音読の会話部分と叙述部分でプロソディに変化があるのに対し、ASD 児ではそのような変化が無いといった特徴が見られた。

研究Ⅱでは、研究Ｉで収集した音読音声について、第三者による聴覚的評価を行い、物理的な値との整合性を検討した。その結果、全ての項目（速さ、高さ、抑揚、全体の印象）において、ASD 児と定型発達児に評価に差異が見られた。したがって、ASD 児の音声は定型発達児よりも、①遅い、②声が低い、③抑揚が平坦、④全体の印象に違和感がある、と知覚されることが示唆された。速さ、高さ、抑揚についての評価は研究Ｉで行った音響分析結果との相関が見られ、物理的な値と聴覚心理的印象が一致することが示唆された。

以上の結果から、ASD 児のプロソディについて、音響分析を用いることでより客観的に、ピッチの変動幅など定型発達児とは異なる特徴があること、音響分析による差異は、聴覚的評価の差異と一致していることが示唆された。更に、ピッチ変動幅や高さの評価といった項目については、ASD 児の IQ および自閉症スペクトラムスクリーニング質問紙の得点との相関関係が見られ、プロソディの特徴が ASD 児のより詳細な特性を明らかにするための新たなアセスメントの指標として活用できる可能性が示唆された。

研究成果発表方法

本研究の一部は、平成 24 年度日本教育心理学会研究発表会（琉球大学）で発表した。原著論文として日本聴覚言語障害学会、第 43 巻 1 号に投稿中である。